たり、○略中卯月の始ッかた、河原におり立て、かなたこなた見めぐるに、○略中河の洲の石あるかたに、ほのかにあはれなる聲のヒウ〳〵ときこゆ、小鳥などの雛にやと思ふばかりなり、人々あれは何の音ぞやと打みるに、さるものもみえず、猶ことかたにもなくは、河蝦なめりと、耳そばたてきけば、いとあはれにうるはしき物から、浪の音に打けたれて、ほのかなれど、小田につねき、つる蛙のにるべくもあらず、夏の末より秋にいたりなば、いかばかりうるはしからんと思ひやらる、去年の秋よりおもひ立て、こゝろを盡し、この春も二月ばかりより、玉川におり立て、下つ瀨より河につきて、二十里にちかき間を、○略中さかのぼりたるかひありて、秋をもまたで、その聲をきゝぬるこそうれしけれ、人々そのかはづ得てしがなとて、○略中あさりみれど見えず、たゞ水の底にて鳴やうにきこゆ、後によく〳〵みとめつれば、みな水中より出たる、黑き石の上、いはほの間などのかすかなる處に、同じ黑色なるちひさき蝦の、とりつき居てなければ、ふとはみえざるものなり、○略下

蝦蟇事蹟

〔日本書紀十應神〕十九年十月戊戌朔、幸吉野宮、時國樔人來朝之○略中夫國樔者、其爲人甚淳朴也、每取山菓食、亦煮蝦蟆爲上味、名曰毛瀰○略下

〔扶桑略記四皇極〕三年十一月、○略中王宮○略中有一蟇如人立行、

〔續日本紀二十九孝謙〕神護景雲二年七月庚寅、大宰府言、肥後國八代郡正倉院北畔、蝦蟆陳列廣可七丈、南向而去、及于日暮、不知去處、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆三年五月癸未、攝津職言、今月七日卯時、蝦蟇二万許、長可四分、其色黑斑、從難波市南道、南行池列可三町、隨道南行、入四天王寺內、至於午時、皆悉散去、

〔水鏡下桓武〕同○延曆三年五月七日、かへる三萬ばかりあつまりて、三町ばかりにつらなりて、難波より天王寺へまいりにき、此事都うつりのあるべき相なりと申あへりし程に、廿六日にやましろ